どちらさまのままで

植田儀武

—おたくさまはどちらさま？
と病床を見舞う私に母は問うた
慌てて義姉が
—よしたけちゃんや
お婆ちゃんの息子の
神奈川から帰ってきてくれはった
と注釈をつけた
—ああ神奈川から
わたしの息子も神奈川にいます
わざわざ遠いところから来てくださって
なんのもてなしもできませんがごゆるりと
暮らしのことばが消え
息子が消え
代わりに
馴染みないことばが生まれ
数十年前の距離が蘇る

母よ
ひとまわり小さくなったあなたの頭蓋の中で
どんな狼籍があったのか
一世紀を費やして巻き上げた累々の糸玉を
やすやすと糸くずに変えたのは誰？

切断された糸くずを間に合わせに結びあわせ
はいこれも糸玉と頭蓋に収めたのは誰？
そして
あなたの頭蓋に収められたそれは
あなたであるのか
ないのか

しののめの大地
あなたの羽はまだ伸びきらず
ことばはつぶやきを覚えたばかり
光を放つには幼さすぎる
（飴色の背を割って殻をでた蝉が
あなたの慣れ親しんだ青桐の幹にすがり
たましいを震わせている）
母よ
それでも
それでも
あなたはあなた
私はあなたにとって「どちらさま」
どちらさまのままで
どこまで行けるのか分からぬが
あなたとともにどんな新たな物語を紡げるか

植田儀武
うえだよしたけ
1946年生まれ
神奈川県藤沢市在住
2012年教員および教職公務員退職
これから10年を続けられるものとして詩作を志す